

2014年度 中央大学特定課題研究費 ー研究報告書ー

所属	文学部	身分	教授
氏名	富田 拓郎		
NAME	Takuro Tomita		

1. 研究課題

（和文）インターネット乱用傾向に関する尺度の信頼性と妥当性の検討-インターネットにおける「演技性」を含めた新しい尺度作成の試み-

（英文）Development of Generalized Problematic Internet Use Scale for Japanese undergraduates

2. 研究期間

2年

3. 研究の概要（背景・目的・研究計画・内容および成果 和文 600字程度、英文 50word程度）

（和文）

<研究1>インターネット乱用傾向に関する尺度の作成

【問題】近年の研究で、インターネットの過度な利用がもたらすさまざまな心理・社会的問題が指摘されているが、日本における実証的研究は未だ十分には行われていない。本研究では、Davis(2001)による全般性インターネット乱用(GPIU)の認知行動モデル(Caplan, 2010)を元に大学生用全般性インターネット乱用尺度の作成を行い、GPIUの認知行動モデルを検証するため以下の仮説に基づき作成したモデルを共分散構造分析によって検討した。GPIUの構造仮説によれば、オンラインにおける交流を好む傾向(POSI)はネットの匿名性によって現実とネット上で示される人格・振る舞い(演技性)との分離へとつながり、ネット上で居心地の良さや使用者の不適合的認知を生じさせ、ネット利用へのとらわれや過剰利用を引き起こすとされる。これに従い、社会的スキルや対人恐怖心、現実への不満・不安がPOSI、ネット人格へと影響する変数モデルを設定した。同時に自己愛の不適合的側面はネット上で理想の自己像を形成することにより、ネット人格に影響し、こうした変数が自己制御の低下によって最終的に生活への悪影響と不適合的コーピングなどの問題につながるというモデルを設定した。

【方法】大学生663人を対象とし、全般性インターネット乱用傾向、エフォートフルコントロール、自己愛人格傾向並びに対人恐怖心性、社会的スキル、大学生活の心配事、対処方略に関する質問紙を実施した。

【結果と考察】因子分析と共分散構造分析の結果、全般性インターネット乱用尺度の構成と構造モデルは先行研究を概ね支持する結果となり、モデルは許容できる適合度を示した。他の尺度との関係をパス解析によって検討したところ、初期モデルを元に改訂されたモデルの適合度は $\chi^2(230)=$

446.06, $p<.001$, GFI=.93, AGFI=.91, CFI=.96, RMSEA=.04 となり、許容できる値を示した。標準化係数から社会的スキルの欠如による対人劣等感、インターネットでの対人交流を好む傾向や現実とインターネットで示される人格とのずれに影響することが示された。また、全般性インターネット乱用の認知的側面と行動的側面は、自己制御機能の低下に媒介される可能性が示唆された。

<研究 2>愛着、エフォートフルコントロール、インターネット乱用傾向との関係

【問題】研究 1 で示されたとおり、インターネット乱用傾向は自己制御機能と関わっていることが示唆されている。自己制御機能は愛着傾向と関与することが、主として乳幼児期から自動機にかけてのこれまでの研究で示されている(Schore,2001)。さらに近年注目されているセルフ・コンパッション(自らへの慈しみ)はこうした自己制御機能を高め、アディクション傾向、ネガティブ情動や身体症状を緩和することがこれまでに示されている。しかし日本の大学生において、こうした変数間の関連性は未だ明らかになっていない。本研究ではインターネット乱用傾向の周辺変数であるこれらの変数との関係を探索的に検討した。

【方法】大学生 313 人を対象とし、全般性インターネット乱用傾向、エフォートフルコントロール、愛着、抑うつ、身体症状などに関する質問紙を実施した。

【結果と考察】全般性インターネット乱用傾向は研究 1 と同様の因子構造が示された。さらにエフォートフルコントロール、愛着との相関が示された。本研究データは、変数間の構造的関係が示されるかどうか、現在分析継続中である。

(文献省略)

○研究成果の発表方法・本学における教育活動への還元(予定を含む)

本研究 1 は学会誌に論文投稿し、現在審査中である。また研究 2 も今後再分析を行った上で、学会発表や論文投稿を予定している。さらに研究助成者の担当授業においても紹介し、学生への教育活動で活用される見込みである。

(英文)

This study aimed to develop Generalized Problematic Internet Use Scale (GPIUS) for Japanese college students, and to examine the relationship between variables associated with GPIU. Participant were 663 undergraduates, answered a questionnaire with GPIUS and related measures. Results of structural equation modeling supported previous research and the hypothesis of this study. As well, the relation model of GPIUS with psychopathology, self-control and maladaptive coping were enough fitted. It revealed that social inferiority and lack of social skill are effect preference for online social interaction and a personality-divergence real life and online. Finally, current study suggested that the cognitive and behavioral aspects of GPIU are mainly mediated by self-control.

研 (様式 1 6 - 3 号)

3. 研究成果について (研究期間終了後 2 年以内・予定のものを含めて記入)

現在学会誌に投稿し、審査中である。